

格子欠陥の立体表現

PICFA

本田雅啓, 原田啓之

Three-Dimensional Expression of Lattice Defect

PICFA

Masaharu Honda and Hiroyuki Honda

今回の制作は、障害者施設に通所するアスペルガー症候群で自閉症傾向にあるアーティスト本田雅啓（以下、本田）が制作を行った。本田はコミュニケーションが苦手であり、自身が通所している障害者施設 PICFA 施設長の原田啓之（以下、原田）が本田を見ていた様子から以下を記載した。

今回の企画を聞いた時、素直にとっても面白い企画、挑戦だと感じた。異業種であり、また障害のあるアーティストが参加させていただけることにとっても喜びを感じた。障害があり、IQ 的に理解できるかどうかと不安はあるが、どのような化学反応が起きるか、とても楽しみだと感じた。

その後、実際に岸村先生の研究を聞いて、ナノのスケールから見る生命現象ということで、生命科学、医学、薬学を考えていく研究があることを知った。その中に細胞をまねたカプセル化技術というのがあり、人口細胞質ビーズ（スライム的）が特定のタンパク質を吸収し、タンパク質を居心地の良いところに誘導できたとあった。人口細胞質に天然のタンパク質を濃縮できる技術は素直に凄いレベルで研究をしていると感心した。また、同時に凄く興味が出た。今回、作品を制作した本田は自閉傾向のアスペルガー症候群という障害がある。本田の絵は大胆であり、緻密。また立体を制作する時は、感じたままに図面などを作ることなく制作を行う。本田の中で岸村先生の研究をどのように捉え、どのような作品を制作するかとてもワクワクした。

岸村先生の話をお聞き、その後すぐに本田の頭の中にある形をマジックで紙に描いたもらった。本田は、スラスラとあっという間に描いた。既にどんなものを作るか、頭の中にあるようだった。その後、彼に使用したい材料を聞



図 1. 制作中の本田雅啓氏 1

き取りし、木材、石粉粘土、ネジ、釘、木工用ボンド、インパクト、ノコギリを準備した。材料を渡し、すぐに一心不乱に作り始め（図1、2）、一日約3時間、10日間で完成した。

本田の作品は、同じタッチ、形で絵を30点ほど描き、その後は全く別のタッチで描くということを18年間続けている。そのスタイルは、フランス政府、フランス美術協会会長にも高く評価され、フランスで8回の展覧会、文化庁からの依頼で国内美術館6箇所など彼の絵や立体物の評価は高い。

今回、格子欠陥の研究などを知り、本田の作品と似ている点があった。空間的な繰り返しの中に従わない要素、それは本田の作品にも見てとれる。規則性のある絵画や立体の中に突然突出する部分や規則性のある色の中に突然歪な色が出るなど格子欠陥と同じような感覚がある。

制作を通じて感じた、格子欠陥とは、私の中ではエロスを感じた。色で言えば差し色、立体で言えば突然突出する歪な部分。そこにエロスを感じ取れた。



図2. 制作中の本田雅啓氏2